



金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(上) :
記憶を語ることの歴史性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅見, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005053

金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(上)

——記憶を語ることの歴史性——

浅見 洋子

【目次】

◆金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(上)

——記憶を語ることの歴史性——

第一章 よみがえる記憶

はじめに

- 一 三つの〈種族検定〉 ——「種族検定」
 - 二 〈死〉から〈再生〉へ ——「わが性わが命」
 - 三 〈運配〉された手紙 ——「究めえない距離の深さで」
- おわりに

(以上、本稿)

◆金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(下)

——猪飼野の風景と民衆——

第二章 空想と変革

はじめに

第一章 よみがえる記憶

はじめに

- 一 ふたつの「道」 ——「道(洪じいさん)」
 - 二 祖国へつづく〈道〉 ——「海の飢餓」
 - 三 再編される〈労働〉 ——「労働昇天」
 - 四 貨幣経済への反逆 ——「しやりっこ」
- おわりに

(以上、『言語文化学研究』第七号／二〇二二年三月刊行予定)

『日本風土記Ⅱ』は、一九六〇年代初頭に金時鐘の第三詩集として計画されながらも出版間際になってそれが頓挫し、原稿も四散してしまった幻の未刊行詩集である。この詩集は、金時鐘が共和国の朝鮮作家同盟及び、当時所属していた左派在日朝鮮人運動組織から厳しい政治的批判を受け、一時は一切の表現活

金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(上)

——記憶を語ることの歴史性——

動から遠さからなければならなかった状況のなかで、長く闇に葬られてきた。⁽¹⁾『日本風土記Ⅱ』の存在が知られるようになったのは、『集成詩集 原野の詩 1955～1988』(立風書房／一九九一年一月)が出版された際である。⁽²⁾『原野の詩』の「あとがき」で金時鐘がその存在を明かし、「金時鐘年譜」(野口豊子編)では、金時鐘の手許に唯一残されていた「目次の控え」⁽³⁾が公開されたのである。さらに『原野の詩』では、その時点で判明していた七篇の詩が、その後書かれた四篇とともに「拾遺集」として編み直されている。また宇野田尚哉と筆者が「目次の控え」を手がかりとして、それぞれの初出誌にあたるという詩集の復元作業を進めてきた。⁽⁴⁾今、『日本風土記Ⅱ』は徐々にその全体像をあらわしつつある。

こうした復元作業を通じて気づかされることは、それまでになく金時鐘が自分の来歴を吐露しているということである。もちろん、第一詩集『地平線』(チングラレ発行所／一九五五年二月)や第二詩集『日本風土記』(国文社／一九五七年一月)においても、金時鐘の記憶を投影したような言葉は散見される。しかし、『日本風土記Ⅱ』ではさらに具体的に、生まれた場所、育った場所、済州島四・三事件から日本への脱出、故郷に残してきた父母への追慕に至るまで、日本へ流れてきた経緯が複数の詩

篇に書きとどめられているのである。

詩集冒頭の「カメレオンのうた」は、組織を風刺した作品である。⁽⁵⁾「俺」は、「スローガンの張り出しに余念がな」い「総連」を「ロボット一族」と称する。これに対して「少しの苦痛もなしに／全然別な芸当を同時にやつてのけ」る「俺」は、「清教徒で／猥欲主義者」であり、「共産主義者で／資本主義者」であり、「目まぐるしい労働の騒音を好むと同時に／俺は典雅な閑静さを必要とする。」という、正反対の主義や趣味をあわせ持つ人物として造形されている。詩の冒頭で「俺」は、次のように主張している。

正確に云つて／俺の過去は何斗分に相当するか？／汲み取らぬまゝ放置された／共同便所のように／種々雑多な記憶が／このせまい頭蓋骨の中で群雄割拠だ。／(中略)／もしこれを量りにかけるなら／このちつぽけな豆腐の集りは／原子核のそれよりも重いことであろう。

(「カメレオンのうた」)

「俺の過去」は「原子核のそれよりも重い」という主張は、「俺」も個性あるひとりの人間にほかならないという「俺」の宣言で

ある。それは、人間を画一的に統制しようとする、組織のあり方への痛切な批判となつていよう。

「カメレオンのうた」が詩集冒頭に配置されていることからすると、「俺」の「記憶」は「原子核のそれよりも重い」という引用部の一節は、詩集の構造をも暗示していよう。すなわち『日本風土記Ⅱ』では、金時鐘が自身の過去を問い返した詩篇が、記憶をさかのぼるような形で要所に配置されているのである。

組織側の論理によつてその存在をまさに全否定されたとき、自分が一個の人間として蓄えてきた記憶を確かめるように、金時鐘は一気に過去をさかのぼるのだ。本稿では以上の観点から、『日本風土記Ⅱ』の主軸を成すと思われる三篇の詩を中心に分析し、詩集の位置づけを試みたい。

一 三つの〈種族検定〉

——「種族検定」

「カメレオンのうた」の次には、「種族検定」と題された詩が置かれている。⁽⁶⁾この奇妙なタイトルの通り、主人公である「俺」が次々と登場する人物から〈種族検定〉を受け、その内幕が暴かれていくという詩である。「角をまがることで／彼と俺との

関係は決定的なものとなつた。」という冒頭の一文は、そのような状況設定を、緊張感を伴つて鮮やかに示していよう。

詩中の「彼と俺」とは、組織の活動家である「俺」と、それを尾行する私服警官のことである。こうして尾行されていることが決定的になつた瞬間、「彼」は「奴」へと呼称が変えられ、「俺」の逃走劇がはじまる。執拗に「俺」につきまとう「奴」は、あたかも「俺」自身の影でもあるかのようだ。しかし、「俺」は「奴」を「犬」と呼び、自分は「それ以上の牙」を持った雄々しい「四肢獣」に変身するのである。そして、いつもなら同胞集落にさしかかる角で「俺の痕跡をくらます」ところだが、この日は「俺のカスバ」に「奴」を誘いこみ、「親愛なる同胞」に協力を仰いで「奴」をやりこめることを思いつく。このあと、追う者と追われる者の内面の緊張、「奴」を尻にかけようとする「俺」のかけひきが張りつめた文体で描かれ、テンポよく場面が進んでいく。金時鐘は、「奴」が「俺」を、「俺」が「奴」を追いかけていくという設定を効果的に用いながら、「追いつめられ」通しだった「俺の半生」をえぐり出し、問い返そうとしているのだ。

この詩で「俺」は、次々と登場する人物たち（奴・「猫背のドクター」・「アジユモニ」・「おっさん」・「G-1靴」）によつて、三種

類もの〈種族検定〉にさらされる。とりわけ、全篇にわたって終始「俺」を追いつめにかかる「奴」は、〈種族検定〉をより苛酷にし、「俺」の自己省察を加速させる重要な人物だ。

一度目は、「奴」と「猫背のドクター」が行う、日本人が朝鮮人を排除する〈種族検定〉である。私服警官の「奴」は在日朝鮮人に対する日本国家の態度を、「猫背のドクター」は日本人の庶民感情を体現した人物であるといえよう。国家権力を盾に強圧的な態度に出る「奴」とは対照的に、「潜在性B1欠乏症による多発性神経炎」を起こした「俺」に「変なうす笑いを浮かべ」て「日本人なみですなあ」と言うだけの「猫背のドクター」は、その存在を見落としそうになる。おそらく「猫背のドクター」は、「俺」に愛想を言ったに過ぎないのだろう。だが、その短いセリフには、朝鮮人が日本人並みに「白米」を食っているのかという、無意識レベルの偏見が透けて見えるのだ。

ここまでは比較的わかりやすい対抗関係なのだが、場面が進み、「おつさん」と「アジユモニ」が登場すると、事態は込み入ってくる。「俺」を〈種族検定〉にかける彼らは、「俺」の「親愛なる同胞」たちだからだ。次の引用は、「奴」を摘発する「俺」の叫びが「俺」自身にはね返ってくるという箇所であるが、これはこの詩のなかで最も熾烈な場面である。

俺はもんどり打って叫んだ／＼犬だア！／＼脂くさい土間が総立ちになつた。／＼奴は俺におおいかぶさるようにして／＼親愛なる同胞にしめあげられた。／＼正真、親愛なる同胞に！／＼脂とにんにくと人いきれの中で／＼俺は当然の報酬を待つて云つた。／＼夏はやはりケジャン（犬汁）ですなあ……！／＼鉢を取りかえていたアジユモニ（女将）がげげんそうにまじまじと俺を見た。／＼そして振り向きさま／＼おつさん、こいつも犬やでエ！

（種族検定）

同胞の寄り合いに辿り着いた「俺」が突然「犬だア！」と叫び、「奴」は「おつさん」によって捕えられるが、してやったりと「当然の報酬」を待つ「俺」が、今度は逆に「おつさん、こいつも犬やでエ！」と「アジユモニ」に摘発されるという場面である。「俺」と「アジユモニ」は「親愛なる同胞」であるはずなのに、唐突に「俺」を「犬」呼ばわりする「アジユモニ」のセリフは、いささか異様にも思える。引用部を読む限り、「アジユモニ」がなぜ「俺」を「犬」と呼んだのか、その理由がよくわからないのだ。

細見和之は、この場面を「本来の味方と敵の関係が宙吊りにされる」たまたま、「俺」の「のたうちだけが一切の現実として存在している」と評しているが、ここで説者は、「俺」の立ち位置が一体どこにあるのかが不分明な不安のなかに、一気に放りだされてしまうのである。「アジユモニ」が「俺」を「犬」と名指す理由について、呉世宗は「彼女が迷うことなく『おっさんこいつも犬やでえ!』と断言するのは、間違いなく『俺』の『犬汁』⁽¹⁾『개장』の発音が悪かったため」であり、「正常な朝鮮語という觀念が、『犬』と『人間』を分かつ役割を担わされている」と指摘している。しかし、そもそも朝鮮語をほとんど話せない二世が多数を占めつつあった在日の日常で、果たして「正常な朝鮮語」という觀念⁽²⁾が〈種族検定〉の判定基準として機能するだろうか。むしろ、この謎を解く重要な鍵は、次の場面で「外人登録を見せろ」／「登録を出せ」／「登録を出せ」という「奴」の執拗な尋問を受けた「俺」が吐露する告白のなかにあるのではないだろうか。

生れは北鮮で／育ちは南鮮だ。／韓国はきらいで／朝鮮が好きだ。／日本へ来たのはほんの偶然の出来事なんだ。／つまり韓国からのヤミ船は日本向けしかなかったからだ。

／といつて北鮮へも今いきたかあないんだ。／韓国でたつた一人の母がミイラのまま待つているからだ。／それにもまして、それにもまして／俺はまだ／純度の共和国公民に
はなりきつてないんだ……⁽¹⁾

(種族検定)

「純度の共和国公民にはなりきつてないんだ」という「俺」のセリフから、先ほどの場面は共和国支持者の寄り合いでの出来事であったことが推察される。つまり「俺」は、本来自分が帰属しているはずの「共和国」の側から〈種族検定〉されたわけである。ここで「俺」は、「北鮮」で生まれ、「南鮮」で育ち、「ヤミ船」で「日本」に流れ着いたという自分の来歴を吐露している。そのうえで、「純度の共和国公民」たるべき自分が本心に好きなのは、「韓国」でも「共和国」でもなく、実は「朝鮮」なのだという胸の内を述べているのである。このような「俺」の率直さは、多少なりとも自分の本心を欺くことで「純度の共和国公民」たり得ている者にとつて、一番触れられたくない暗部をえぐり出してしまうのだろう。「俺」の存在は、彼らの内なる敵として、一枚岩の「共和国」に亀裂を生じさせてしまうからだ。従つて「アジユモニ」は、普段から「共和国」の權威を

乱す存在であろう「俺」を認識して、「おっさん、こいつも大やでエ！」と叫んだのである。¹³⁾

このあと「俺」は、「奴」とともに「おっさん」の一撃を「脳天」に喰らう。その衝撃で意識が遠のくなか、今度は「日本」に来る前に受けた〈種族検定〉の記憶がまさまさとよみがえることになる。

遠い耳鳴りのように甦えつてくる蟬のうなり。／たしかに俺が追いつくばつたのは／邑内のほこりつばい大通りだ。／銃床がけずりとつた溝つぶちの断面に／親指大のみみずがでらでら汗をにじませてのたうつていた。／こいつはバルゲンイ（赤狗）でもザコだで！／鼻先で流調な朝鮮語をあやつつていたGー靴が／俺の顔をけ落とした。／かけりを得たみみずが／俺の喉元でながながと躍動をゆるめていった。

（「種族検定」）

「Gー靴」によって地面に「追いつくば」られ、「顔をけ落と」されるといふ「俺」の屈辱的な記憶が充填されたこの場面では、「Gー靴」の「こいつはバルゲンイでもザコだで！」

というセリフが生々しく響く。ここで「俺」は、反共主義に覆われた「韓国」から、三つ目の〈種族検定〉にかけられるのである。「流調な朝鮮語をあやつつていたGー靴」が「俺」を「バルゲンイ」、つまり「アカ」と呼び捨てて蹴飛ばすという設定には、解放後の朝鮮半島に渦巻いていた、「国際関係のレベルでの米ソ冷戦とこれと結びついた国内の左右の亀裂」が凝縮的に表現されている。「流調な朝鮮語をあやつつていたGー靴」とはすなわち、米軍政の思惑で導入された、朝鮮人による右翼勢力のことなのだ。日本帝国主義時代に対日協力者として暗躍していたいわゆる親日派は、解放後に「民族反逆者」として追放された。だが、解放後に湧き起こった社会変革へのうねりのなかで、民衆と直接対立することを恐れた米軍政は、朝鮮総督府の人員と機構を継承することでその動きに対立した。金時鐘も強調していることだが、このようにして民衆と米軍政の対立は「同族どうしの抗争に入れ替え」¹⁵⁾られ、南朝鮮社会に深刻な亀裂を走らせたのである。さらに金時鐘の来歴に照らし合わせるならば、先の引用部は、金時鐘が南朝鮮労働党の党员として関わった

四・三事件での一場面であることが推定できよう。¹⁶⁾

このように「俺」は、「日本」からは「潜在的犯罪者」、あるいは日本人より劣位の存在として、「共和国」からは「民族虚無

主義者」として、「韓国」からは「バルゲンイ」として排除されてしまう。同時に、はじめは勇ましい「四肢獣」として登場した活動家の「俺」も、場面が進むごとに「奴」と同じ「犬」、さらには「バルゲンイでもザコ」とそのイメージを変化させていく。その果てに、「種族検定」は「青白い日輪の乱反射に舞う種族不明の登録証！」という一行で締めくくられるのである。

金時鐘の詩において「太陽」は、権力による圧倒的な暴力のメタファーとして出現する。特にこの詩では、「日本」・「共和国」・「韓国」、さらにその背後に控えるアメリカの影が想定されるよう。「俺」を「追いつめ」、生きる場を次々と奪っていく暴力的な状況が、「青白い日輪」に集約されているのだ。「種族不明の登録証」が「夏」のざらつく太陽の「乱反射に舞う」という結びは、どこにも所属できない「俺」の宙ぶり状態を簡潔に表現している。それは、「俺」の不安定で苦しい状況を如実に物語っている。しかしこの宙ぶり状態には、単一の国家・民族・アイデンティティーに帰属するのが唯一の生き方であると考え、事の虚構性を「乱反射」させる可能性もまた、兆しているのではないだろうか。いずれでもないという「種族不明」状態は、いずれでもあるという「カメレオン」(「カメレオンのうた」)状態へと積極的にとらえ返しうるからである。⁽¹⁸⁾

二一 〈死〉から〈再生〉へ

——「わが性わが命」

第一部「見なれた情景」の最後には、「わが性わが命」という詩が置かれている。初出は『カリオン』二号であり、『カリオン』誌上では、創刊号に掲載された「種族検定」の続編としてこの詩を読むこともできる。つまり、「種族検定」で引きずり出された四・三事件の記憶に導かれるように、「わが性わが命」では事件のさらに具体的な生々しい記憶がよみがえるという流れになっているのだ。「種族検定」を引き継ぐ形で「わが性わが命」においても四・三事件の記憶が問い返されていることに關して、これが単なる偶然なのか、それとも意図的なのかはわからない。だが、痛みそのものとして凝り固まった記憶を、ここで金時鐘が痛苦とともに問い返そうとしていることは確かだろう。同じ時期に書き進められていた『新鴻』とともに、金時鐘が正面から四・三事件と向き合った二連の詩のひとつが、この「わが性わが命」なのである。

「わが性わが命」は、「白亜紀の最後を／そんなりおし包んでいる／氷山はないか!？」という「ぼく」の突拍子もない空想からはじまる。「断絶の間に張りつめた／恐竜の脳波」を採っ

て、「この深癖なるものの臨終にも／求心性ポツ起神経は働いたかどうか」を知るためである。「忽然と一切の種族を断つた」深い「恐竜」でさえも、その絶命の間際には「ポツ起」したのだろうかという「ぼく」の疑問である。

さらに「恐竜」の次には、「視界をよぎつて／うねりにくねる／一頭の鯨」が登場する。漁師の放つた鰯が「鯨」の脇腹を貫くという場面である。そして、「くるとゴム質のまつ白い腹を見せて」もだえる「鯨」と入れ替わるように、場面は次のような生々しい現場へと移行する。

ピン／と張つたロープに／永劫／小刻みにうつ血してゆくのは／義兄の金だ。／二十六の生涯を／祖国に賭けた／四肢が／脱糞までの硬直にいやが上にもふくれあがる。／
 “えーい！目ざわりな！”／軍政府特別許可の日本刀が／予科練あがりの特警隊長の頭上で孤を描いたとき／義兄は世界につながるぼくの恋人に変わっていた。／削がれた陰茎の傷口から／そうだ。ぼくは見てはならない恋人の初潮を見てしまったのだ。／ガス室を出たの／上気したアンネの股間にたれこめた霧。／ずり落ちたバジの上に点々としてゆんで／済州島特有の／生あたたかい季節雨に溶けこんで

いた。⁽¹⁹⁾

(わが性わが命)

詩には注が付けられておらず、四・三事件に関わる具体的な事象が記されているわけでもない。おそらく、詩が書かれ、発表された当初は、四・三事件と重ねて読まれることはほとんどなかったのだろう。しかし、金時鐘が四・三事件の体験を語りはじめた現在、「済州島」という地名は、そこで引き起こされた固有の出来事を喚起する。⁽²⁰⁾

先の引用は、「義兄の金」と呼ばれる二六歳の男性がロープで首を吊るされ、今まさに息絶えた場面である。そのように張り詰めた空気の中で、死者となった「義兄」の身体は、突如「性ポツ起」してしまうのである。絶命の直後に「性ポツ起」した「義兄」は、「世界につながるぼくの恋人」と呼ばれ、「ぼく」の想像は「ガス室」で「初潮」を迎えた少女「アンネ」へと及ぶ。⁽²¹⁾

この場面で印象的なのは、「義兄の金」と「アンネ」の〈生〉と性、そして四・三事件とホロコーストの記憶が分かちがたく錯綜していることである。ホロコーストの強制収容所では、ガス室に送りこまれた少女たちが、次々と初潮を迎えるという現象が見られたそう。それは死に直面したまさにその瞬間、自分

の分身を生きながらえさせようとする生物としての本能が、一気に凝縮されるためなのだろうか。金時鐘は、すでに周知の出来事であるヨーロッパで起こったホロコーストを参照させながら、詳細に語ることでできない、語ることを許されない四・三事件の記憶をなんとか読者に受け渡そうとしているのだ。

処刑の場面にそぐわない間の抜けた「性ポツ起」が気に障った「特警隊長」は、その「目ざわり」な「陰茎」を「軍政府特別許可の日本刀」で削ぎ落としてしまう。四・三事件当時、拷問の最中に陰茎を切り落とすという行為が実際に行われていたのかどうかはわからない。しかし、これに類する、目を覆いたくなるような様々な性的暴力がふるわれていた。それは、人間を拷問にかけるといふ状況下で肥大した、猟奇的な欲望によるものと考えてよいだろう。ところが「わが性わが命」では、「ぼく」がそれを彼らの「おびえ」として解釈しているのである。そしてこのことは、「わが性わが命」の読解において、決定的に重要な意味を持っているのではないだろうか。

「義兄」の「陰茎」が「目ざわり」だという「特警隊長」に対して、「ぼく」は「吊つた男よ／吊られた男の／性ポツ起の／何が／目ざわりだったのか?！」と問いかけながら、「通常／生きることの／生命とは／また別の／生き抜く生命に／おびえてた

／お前の／お前は／そこにいなかっただか?！」という推断をくだしている。「特警隊長」を苛立たせ、おびえさせたのは、死んで尚しよろこびもなく生きようとし、形を変えてでも命を繋ごうとする「義兄」のかなしいまでの〈生〉への執着だ。そうして「ぼく」は、次々と出現する敵の幻影を恐れる余り、それを根絶やしにすることで安心を得ようとする彼らが、いかに臆病で卑小であるかを暴き出しているのだ。

一九四八年四月三日、祖国が分断されようとする状況に抵抗し、済州島で民衆による武装蜂起が起こった。しかし、数年にわたる権力による弾圧の過程で、「ひとりの赤色容疑者のために村をまるごと焼きつくす」ようなますますまじい暴力に覆われた島は、長い間、沈黙と忘却の淵に沈みこむことになる。金時鐘はその暴力に抗うように、〈死〉から〈再生〉への経路を「わが性わが命」に描き込んでいた。このあと、拷問で「陰茎」を削がれた「義兄」と連動するように、「今しも／腹部に躍り上がった男が／ぼくの眼底で／まず切り落とされたのは／それだ!」、捕獲された「鯨」の「陰茎」が切り落とされるのだが、詩は次のように結ばれる。

／油にもならねえ!／大音響とともに／氷山が揺れ動く

極地で／熱い血を通よさせた／生の使者が／今／蜚集する
 ／数百万億の／プランクトンの／景観のまつただ中に／帰る。

（わが性わが命）

利用価値のない「丈余の一物」として切り落とされた「鯨」の「陰茎」が、「熱い血を通よさせた／生の使者」と呼び換えられ、「数百万億の／プランクトン」が漂う深海に、轟音とともに沈んでいく光景は鮮烈である。ひとつひとつは小さくて目に見えない「プランクトン」が、「鯨」の「陰茎」を「生の使者」と呼ぶ「ぼく」の想像の中で、「数百万億」の「景観」となつて浮上するのである。このとき海は、無数の表情を持った（³⁵）集合体として読者の前に立ち現われる。ただひとつの卵子を指して泳ぎきる数億の精子の姿をもオーバーラップさせるこの場面は、読者の生命体としての根源的記憶を掻きぶり、無限の可能性を経て生み落とされる生命が、いかにかけがえない存在であるかを痛感させよう。

金時鐘は「わが性わが命」において、「白亜紀の最後」に「忽然と一切の種族を断つ」た「恐竜」、「四肢も／表情も／二千万年の生存に代え」た「鯨」、「二十六の生涯を／祖国に賭け」た「義兄の金」の（³⁶）生を、多重プーガのように重層的に描ききつ

た。冷戦下のアメリカの身勝手な戦略が背景にあったとはいえ、四・三事件は同じ「種族」の間で引き起こされたホロコーストであった。「恐竜」や「鯨」を表わす「一切の種族」・「二千万年の生存」という言葉からは、四・三事件をくぐり抜け、祖国の分断、朝鮮戦争という、同じ民族による争いの渦中を生き抜かなければならなかった在日朝鮮人詩人の、苦渋の表情がうかがえる。また、第一部には、核をテーマにした詩が二篇置かれている（³⁷）「木綿と砂」・「哄笑」。「わが性わが命」は、人類が人類を根絶やしにしようする最終兵器、あるいはその「平和利用」を争って開発し、地球的規模であらゆる生命の存続の危機を招来しつつあった同時代への、痛烈な批判としても響いていよう。

「わが性わが命」は、一貫して「ぼく」の視点から描かれている。まず、「恐竜」の空想から始まり、「鯨」が「ぼく」の視界に登場し、もたえる「鯨」に触発されるように四・三事件の記憶がよみがえり、再び「鯨」の場面で詩が終わる。この巧みな構成、そして「ぼく」の空想と記憶の交錯は、命の営みの壮大さを引き出す効果的な舞台装置として機能している。一説しただけでは、冒頭の滑稽さや「性」の躍動感が頭に残り、それが何を表現しようとしているのかにまでは、なかなか思い至らない。しかし、「わが性わが命」が実は濟州島四・三事件について

書かれた詩であること、そして太古にまで遡って命の重みを確認しようとする詩であることに気づかされると、読者は一気に詩の世界に引きずりこまれ、この詩に抱えられた膨大な生命の記憶に圧倒されることになるのだ。

海は、地球上に生命が誕生して以来、連続と繰り返される〈生と〈死〉を記憶してきた。金時鐘は、「鯨」の〈死〉をその営みの中に「帰る」と表現しつつ、四・三事件の死者の鎮魂と〈再生〉を試みたのではないだろうか。そのうえで、死者の怒りやかなしみを「わが性わが命」と名付けるこの詩は、その痛みを自分自身の痛みとして引き受けようとする詩人の気魄を感じさせる、優れた一篇である。「わが性わが命」が抱える生命の記憶は、人間の〈生〉が蹂躪される極限状況とその不条理を、静かに問いただしているのである。

三 〈遅配〉された手紙

——「究めえない距離の深さで」

既に検討したように、第一部の特徴は、政治性を帯びたスケールの大きい詩を中心に構成されていることにある。²⁸⁾一転して第二部では、第一部で問われた大状況に翻弄される、個としての

人間の悲哀に焦点が当てられる。第一部が政治的な不条理に正面から向き合った詩であるとすれば、第二部はそのような大きな物語からこぼれ落ちた個の物語の集積であるといえようか。

とりわけ第二部には、金時鐘が濟州島に残してきた父母に思いを寄せた詩が四篇置かれている。「二つの部屋」、「遺品」、「父よ、この静寂はあなたのものだ」という副題が付された「雨と墓と秋と母と」、そして第二部の表題ともなっている「究めえない距離の深さで」である。『日本風土記』の扉には「父の墓前に捧ぐ」という献辞が置かれ、「あとがき」にも『韓国』という隔絶された世界で、一人子のぼくにすら見はなされたまま死んでいった父に、せめてものこの愛うすき詩集をおくる。」という言葉が記されているが、これに対して『日本風土記Ⅱ』は母に捧げる詩集であるという位置づけだったのかもしれない。²⁹⁾

第二部冒頭部の「二つの部屋」と「遺品」は未見であり、残念ながら現在のところこれらの作品を読むことはできない。ただし、金時鐘は詩の内容を記憶しており、筆者がインタビューをした際はその内容について聞くことができた。「二つの部屋」は、一つの部屋で急を告げる電話が鳴り響いており、隣の部屋で「私」がその電話を取ることができずにうずくまっているという設定である。この電話は父からかかってきた、危篤を知ら

せる電話だという気がする。多分、父のミイラのような手がかけている電話なのだ、と。しかし、「私」は襖を開けて電話を取るのが恐くて、耳をふさいでうずくまったままである。⁽⁴⁾

一方「遺品」は、吹田事件のときに、軍需列車が走る線路に鎖でつないだ身を横たえるという命がけの闘争をした「同志」が、後に自殺をした際のエピソードがモチーフになっているようだ。彼の遺品は、古い衣類などが洗濯もされないまま詰め込まれた箱だった。その中から懐中電灯が出てきて、スイッチを入れるとまだ明かりが点いたのだという。祖国の解放を夢見て闘ってきたであろう彼の遺したものが、古い衣類と懐中電灯ひとつであったという事実を前に、金時鐘は身につまされる思いにかられたのであろうか。金時鐘によると「遺品」は、遺品のなかから出てきた懐中電灯を押すとぱっと明りが灯り、国元の父親に宛てて書きかけのまま放っていた「私」の手紙が浮かび上がるという内容であったようだ。このような実話に自身の個人的な思いを重ね、金時鐘は「遺品」という作品を書いたのである。以上の二篇は、未見の詩のなかでも特に興味深い。おそらく第二部の主題を暗示する、かなり重要な位置を占めていたはずである。

また、「雨と墓と秋と母と」と「究めえない距離の深さで」で

は、父も母も、ある共通したイメージで想起されている。弔うこともできずに荒れ果てた「父」の「墓」、そして「父」の「墓」の傍らに「生きてる／ミイラ」として横たわる「母」というイメージだ。金時鐘が父の訃報を受けた直後に書かれた「雨と墓と秋と母と」は、「父」の「墓が濡れる。」と胸を痛め、ひとり残されて「生きてる／ミイラ」になり果てた「母」に思いを寄せた詩である。しかし、金時鐘は「母よ。／山がけむつてる。／海がけむつてる。／そのはるかな／向こうが／野辺です。」と、

はるか彼方に濟州島を見はるかす以外に術がないのである。次の引用は、「究めえない距離の深さで」の冒頭である。

二枚の附箋と／三本の朱線に／低迷した／韓国濟州局発の
／航空郵便が／一つの執念さながら／胴体滑行の／形像す
さまじく／落手した。／炎天下に／かざされた／全通同志
の／手汗のしゅんだ／ハトロン封筒を／開く。

(究めえない距離の深さで)

「母」から送られてきた手紙を「落手」し、「開く」という「ぼく」の行為で書き起こされる冒頭は、今まさにその手紙を手にしたかのような臨場感に溢れている。詩が書かれた時点で金時

鐘の母はすでに亡くなっていたのだが、詩の中では「母」がまだ生きているのだと錯覚してしまうのである。だが、引用部を注意深く読み返してみると、この手紙は転居先不明で何度か転送されながら、「全通同志」の尽力によって奇跡的に「ぼく」の手元に届いた手紙であることがわかる。さらに中盤にさしかかると、詩中においても「母」がすでに亡くなっていることが判明する。すなわちこれは〈運配〉された手紙、それも差出人の「母」が亡くなった後で「ぼく」に届いた手紙なのだ。父母や故郷と異なる時間・場所を生きるということは、否応なく〈運配〉的状况を生きなければならぬということだ。〈運配〉された手紙は、そのもどかしさや無力感を、象徴的に示しているよう。

「ぼく」は、「母」の手紙を「韓国製の／ひつぎ」、「母の／七十余年にわたる／告別の書」と呼ぶ。「母」の死後に届いた手紙は、「母」の死に立ち会えなかった責めを再度「ぼく」に迫るからである。その一方で、手紙の確かな手ざわりが、「母」のぬくもりを生々しくよみがえらせたことも事実であるう。「ザラ箋の／紙質にしみた／においよ。／失われた故郷の／亡国の／かげりよ。」「墓もりができずに／やへむぐらの／おおえるにまかせた／父の／骨の痛みだけを訴えてきた／母よ。」という執拗なまでの呼びかけは、手紙を通して「母」とのつながりを必死

にまさぐろうとする「ぼく」の叫びである。しかし、「ぼく」はやはり「究めえない距離の深さ」に「身もたえる」ことになる。

遠い。／はてしなく遠い。／月への道が開かれても／この距離の究めうる日は／永遠にこないだろう。／母よ。／からからに干からびた／韓国で／ミイラとなった母よ。／宇宙軌道からの地球は／マリモのように美しいそうです。／しんそこ／あなたにいだかれた日々は／美しいものです。／不毛の韓国を抱いて／動かぬ母に／夜半。／いつか孵化するであろう／ういういしい青さを手向ける。

（究めえない距離の深さで）

冷戦下の宇宙開発を背景に、人類の月への到達が現実味をもつて語られはじめたこの時期、金時鐘は距離的には月とは比べようもなく身近にある濟州島を、途方もなく遠い場所として想起している。それは、五〇年の歳月を経て濟州島を訪れ、父母の墓参りを果たしたときに書かれたエッセイ、「50年の歳月、月よりも遠く」(『朝日新聞』夕刊／一九九八年一月二日)にまでつながるイメージである。

ここで「ぼく」は、いくつかの連想を繰り返すことで、月よ

りも遠い「母」への接近をかううじて試みている。「母」、そして「母」が眼る「韓国」は、「からからに干からびた」・「ミイラ」・「不毛」といった修飾語が示す通り、疲弊したイメージによって想起される。しかし、「月」からの連想で、「宇宙軌道からの地球」が差しはさまれると、「母」との日々はしんそこ「美しいもの」であったことが思い起こされるのである。この詩が書かれる数カ月前の一九六一年四月一二日、ソ連のユリー・ガガリン少佐が乗る有人宇宙船「ポストーク一号」が地球一周に成功し、人類初の宇宙旅行が果たされた。帰還したガガリン少佐は、「空はとても暗かったが、地球は青かった」とその印象を語っている。植民地支配、四・三事件、朝鮮戦争、軍事政権による圧政に喘ぐ「韓国」は、地上では「不毛」の地として感じられる。だが、宇宙から眺めたとき、「韓国」もまた、「ういいういしい青さ」を保っているのだ。「宇宙軌道からの地球」は、みずみずしく美しい。それはあたかも、生命のカプセルのようである。生命力に溢れた青い「地球」は、その形からひとつの大きな卵となり、「いつか孵化するであろう」希望がこめられ、「母」の墓前に手向けられるのである。それは、決して辿りつけない遠さのなかで示しうる、死者へ唯一のふるまいであったに違いない。

母の／呪いと愛にからまれた／変転の地で／迎撃ミサイルに追いつめられる／機影のように／父の地／元山を想う。
 ／一人子の／息子に置き去られて／なお／帰れと云わぬ母の／地の塩を／追いつくばつて／なめる。／一九六一・八・一四・夜
 （究めえない距離の深さで）

詩の結びに記されている「地の塩」は、「汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏まるるのみ」⁹³という「マタイ福音書第五章一三節」の有名な一節が踏まえられていると考えられる。聖書の言葉から喚起される「地の塩」の含意は、父母が何ものにも代えがたい大切な存在であるということ、にも関わらず父母を「見離した」という度し難い責めの意識であろう。そのうえで金時鐘は、「地の塩」を文字通り大地にしみ込んだ「塩」、すなわち母の汗や涙の暗喩として転用しているのである。金時鐘は「地の塩」を「遣いつくばつて／なめる」行為によって、母の悲嘆を自らの身体に刻みつけようとしているのだ。これは、前述した「わが性が命」のタイトルにこめられた態度と同様の、金時鐘の痛みの引き受け方である。

さらに、「なお／帰れと云わぬ母」という表現は、この先もこの責めが今現在の痛みとして再生されるであろうことを示している。これまで「母」は、「ぼく」に一度も「帰れ」と言ってきたことがなかった。そして、今受け取ったばかりの「母」の最後の手紙にも、やはり「帰れ」という言葉は記されていないのだから。手紙を受け取った時点で「母」がすでに亡くなっていたことを踏まえれば、「帰れと云わぬ母」は、「帰れと云わなかった母」と過去形で記される方が自然である。だが、(選配)された手紙は、その時間のずれゆえに、「母」の言葉を永遠に現在形として「ぼく」の胸に刻印してしまうのだ。

第二部の後半には、たった一枚の宝くじを「唯一の遺産」に交通事故であっけなく死んだ「地下たび」の男(籤に生きる)、「もがれた足の／親指と／中指と／小指とが／埋めてある」かつての工事現場「御堂筋」を通り「帰国者大会」に向かう「洪じいさん」(道)が登場する。また詩集最後の「檻を放て！」では、「大村収容所」で「むしられたまま／死」に、今だ「つながれたまま」の朝鮮人の怒りが描かれる。これらを踏まえるならば、「地の塩」は金時鐘の母の悲嘆の表明にとどまらず、朝鮮民族の怒りや嘆きにまでその含意の広がりを持つのではないだろうか。父母への思いは金時鐘にとって個別的な題材であるが、

その固有の思いは、意識的に詩集を編むことで普遍性を帯びるのだ。³³⁾

(選配)のイメージに関わることでもあるが、「究めえない距離の深さ」には、金時鐘が生涯を賭けて背負いつづけている、ふたつの決定的な日付が秘められている。(四・三)と(八・一五)である。金時鐘が四・三事件に関わり、済州島に父母を残して日本に流れ着いたことは、前述した通りである。一九四九年五月末、金時鐘が日本行き密航船に乗り込む際、父は母が用意した弁当箱と日本のお金を手渡し、「死んでも私の目とどくところでは死んでくれるな……これはお母さんも同じ願いだ」と告げて金時鐘を見送った。金時鐘の父母にとって(四・三)は、「ひとりっ子の安全を恨み多い日本に託さねばならなかった」呪わしい日付なのである。だが、金時鐘と(四・三)との関わりは、これだけではない。金時鐘の母が亡くなったのも、四・三事件から二年後の一九六〇年四月三日である。金時鐘にとっては「呪いに似一た母の思いの具現として受け止めるをえなかつた事実であろう。

また、詩の末尾に(八・一五)前夜とも読める「一九六一・八・一四・夜」という日付が記されていることにも注目したい。一九二九年、日本の植民地統治下の朝鮮に生まれた金時鐘は、

日本の教育を受けて熱烈な皇国少年として育った。そんな金時鐘の価値観がすべて否定された日が、(八・一五)である。金時鐘は、日本の敗戦、すなわち朝鮮の解放の日である一九四五年八月一五日について、次のように語っている。

終戦。朝鮮人には「解放」であつた年に私は十七歳だつたのですが、祖国「朝鮮」が日本の輒から解放された、父のことがようやく分かつてきたのです。面を上げて言えないことですが、突然の「解放」に日本が負けたということが信じられなくて、私は一週間余りもほとんどご飯が喉を通らなかつたくらい、打ちしおれていました。今に神風が吹いて、この「敗戦」は一ぺんにひっくり返るんだ、と自分に言い聞かすように信じていたのです。

朝鮮では山も揺れよとばかり町中が、村々が、「万歳マンサイ！万歳！」と沸きに沸き返っていたそのときにです。まるではぐれ犬のように私ひとり築港の突堤にたたずんで、口を衝いて出るのは日本の歌ばかりでした。「海征かば」とか「児島高德の歌」とかを唄っては、何日も涙を流していたのです。⁽³⁸⁾

(金時鐘「私の出会った人々」)

その後、民族意識に目覚めた金時鐘は、祖国解放の運動に身を投じるようになるのだが、それは同時に父母との永遠の別れの予兆をも意味した。金時鐘にとつて(八・一五)以前は、民族の命運に無知な歳月だったかもしれない。しかし一方で、これらの日々は、「あなたにいだかれた日々は／美しいもの」として金時鐘の胸に深く刻まれている。だからこそ金時鐘は、その断層のはざままで(八・一五)にこだわり続けなければならないのだらう。

父母を追慕したこれら四篇の詩を改めて振り返ってみると、いずれも交信のすれ違いが繰り返し描きこまれているという共通点に気づかされる。電話に出ることができない、手紙を書きかけたまま送ることができない、帰りつけない、手紙が届かない……。「究めえない距離の深さ」に引き裂かれた親と子は、お互いに激しく求め合いながら、結局いつもうれ違ってしまうのだ。

おわりに

『日本風土記Ⅱ』には記憶をさかのぼり、自分が何者であるかを問い返すという、個人的な主旋律が存在する。本稿では、『日本風土記Ⅱ』の主軸を成すと思われる、それら数篇について

考察した。詩集冒頭の「カメレオンのうた」では、組織を批判しながら、一個の人間として蓄えてきた記憶の重さを主張しているが、これは過去をさかのぼるといふ詩集の構造をも暗示する配置になっている。つまり、組織の論理によってその存在がまさに全否定されたとき、金時鐘は組織の論理とは別のルートで過去をさかのぼり、自分の存在を確かめようとするのだ。「カメレオンのうた」の次に配置されている「種族検定」では、活動家の「俺」とそれを尾行する私服警官のかけひきという緊張感の漂う設定のもとで秘密の来歴を吐露している。そして、「G」に蹴飛ばされ、追いつくばった土の感触とともに、一

気に済州島の四・三事件の現場へと引き戻されるのである。さらに、第一部最後の「わが性わが命」では、「義兄の金」が直面した処刑の場面を描ききり、他者の経験に「わが」(「生」)を重ねることで、四・三事件の記憶を他者と分有しうる記憶へと変換している。自身の来歴を明かした第一部「見なれた情景」は、金時鐘がなぜ(在日)を生きるようになったのか、その経緯と根拠を開示した章であるといえよう。

これに対して、第二部「究めえない距離の深さで」では、四篇の詩(「二つの部屋」・「遺品」・「雨と墓と秋と母と」・「究めえない距離の深さで」)によって、再会を果たすことなく相次いで

亡くなった父母が追慕されている。第二部は、金時鐘の(在日)性が、父母の生と死に立ち会えないことと引き換えに積み重ねられていることを再確認した章であるといえよう。父母への愛と責めが、(在日)をいかに意識的に生きるか、金時鐘に覚悟を迫っているのだ。

このように『日本風土記Ⅱ』では、過去をさかのぼるといふ金時鐘の個人史的な主旋律が存在する。それに加え、同時代の身近な光景を描写しつつ社会を風刺した副旋律が、重層的に絡み合っているのである。さらに次稿では、これら過去と現在において引き起こされてしまった、あるいは引き起こされつつある状況に対し、金時鐘がいかに抗い、そしていかにそれとは異なる世界を構築しようとしたかについて考察する予定である。

自身の来歴や体験について、証言としては数十年間語れない、あるいは語らなかつた金時鐘が、なぜ詩にはそれらの記憶を託しえたのだろうか。そして、証言と詩を分かち瞭然たる要素は、一体どこにあるのだろうか。金時鐘は、四・三事件について金石範と対談した際、次のように語っている。

……自分が直接関わったことを、突き放した形で、情実に
駆られなくて、それ自体が言葉の光であるようにするとい

うことがなかなかできない。(中略)こと「四・三」に関わるとね、塗り固めるような言い訳するような、勇ましく作り上げるような、いざ人民抗争となりや、人民の側の勝利の場面、民衆の苦悩といったものを書くという意味では俗受けする要素が一杯あるわけだけれども、何か哲学的なことを書きたい。思念の奥の紡ぎをやりたい。⁽²⁹⁾

(金時鐘『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』)

金時鐘の詩は、金時鐘が体験した事実を核としている。だが、それらの事実、事実そのものではない。想像力によって再構築された虚構的事実である。事実を虚構として再構築する過程で、事実の重みが必然的に抱え持つ「情実」や「俗受けする要素」が削ぎ落とされ、読者の想像力を喚起する他者性が付与されるのである。『日本風土記Ⅱ』の緻密に計算された構成や選び抜かれた詩語の完成度の高さからは、「私の場合それでいてなお詩は伝達的手段だ⁽³⁰⁾」と言いつける金時鐘の強い意志が感じられる。

金時鐘の詩には、在日朝鮮人詩人としての「金時鐘」が紛れもなく記名されている。従って、金時鐘が全身に背負ってきた個別の、あるいは大文字の歴史的背景を無視して、彼の詩を説

むことはできない。金時鐘の詩を説む際には、読者は作者である「金時鐘」の歴史性に拘束を受けざるをえず、常に「不自由⁽³¹⁾」がつきまとう。しかし、金時鐘の詩は、読者を選別しない。朝鮮人であろうと日本人であろうと、あるいは男であろうと女であろうと、一篇の詩、一冊の詩集として読者の前に開かれている。読者がそれぞれの人生において蓄えてきた記憶を再生装置として、金時鐘の詩はその都度様々な表情を見せるのだ。その意味では、金時鐘の詩は、ぎりぎりの淵で読者への信頼にゆだねられているといえるだろう。金時鐘の詩と対話するためには、作者である「金時鐘」の歴史性に拘束されながら、しかし「私」が出会った唯一の風景を、何度でも提出するしかないのである。

『日本風土記Ⅱ』目次・収録作品書誌

※『日本風土記Ⅱ』の目次と、現時点で判明している掲載書誌を左記に記した。『日本風土記Ⅱ』の目次は二種類あるが(※

注(2)参照)、本稿では野口豊子編「金時鐘年譜」(『原野の詩』所収の「目次の控え」)に拠った。

尚、「拾遺集」所収のものには「○」、不明のものには「▲」を付した。

I 見なれた情景

○「カメレオンのうた」(『ヂンダレ』一七号/一九五七年二月、原題「ロボットの日記」→「拾遺集」では「カメレオン、音を出す」と改題)

「種族検定」(『カリオン』創刊号/一九五九年六月) ↓ 『長篇詩集新編』 / 構造社 / 一九七〇年八月、「III 緯度が見える②」と改題

○「歯の条理」(『新日本文学』/一九五八年一月)

「労働昇天」(『詩学』/一九六〇年八月) ↓ 『季刊三千里』第九号 / 一九七七年二月、「果てる在日(3) (労働昇天)」と改題 ↓ 『猪飼野詩集』 / 東京新聞出版局 / 一九七八年一〇月、「果てる在日(3)」と改題

○「穴」(『現代詩』/一九五八年四月)

「目撃者」(『国際新聞』/一九五六年一〇月三〇日)
「木綿と砂」(『国際新聞』/一九五八年七月二五日)
「哄笑」(『現代詩』/一九五六年八月)

▲「夜の磁気」

○「海の飢餓」(『現代詩』/一九五九年五月)

「わが性わが命」(『カリオン』第二号/一九五九年一月)

II 究めえない距離の深さで

▲「二つの部屋」

▲「遺品」

○「雨と墓と秋と母と」(『ヂンダレ』第一九号/一九五七年二月)

○「犬を喰う」(『ヂンダレ』第一九号/一九五七年一月)

「究めえない距離の深さで」(『詩学』/一九六一年二月)

▲「早い季節」

「秋の夜に見た夢の話」(『国際新聞』/一九五五年一月一九日)

▲「冬」

「春のソネット」(『国際新聞』/一九五六年三月三日)

▲「この地に春がくる」

「春はみんながもえるので」(『詩学』/一九五八年六月)

▲「ぼくらは一日をかちとった」

○「しゃりっこ」(『ヂンダレ』第二〇号/一九五八年一〇月)

「籤に生きる」(現代詩和歌山研究会『詩 ANTHOLOGY 1958』/一九五八年八月)

▲「ふぐ」

▲「二十五年」

「道」(『説売新聞(大阪版)』夕刊/一九五九年六月二三日)

「檻を放て！」(『国際新聞』/一九五八年三月二日)

※『チンダレ』は、神奈川近代文学館に第一四〇一七号・一九号・二

〇号、神戸大学附属図書館総合図書館国際文化学図書館に第一六〇二〇号が所蔵されている。『カリオン』創刊号・第三号は富士正晴記念館に所蔵されている。ただし、宇野田尚哉が当時の会員や同人をあたって『チンダレ』・『カリオン』全書をそろえ、二〇〇八年一月に不二出版から『復刻版チンダレ・カリオン』全三巻・別冊一として復刻された。

『国際新聞』は、国立国会図書館東京本館にマイクロフィルムが所蔵されている。「目次の控え」によると、「早い季節」は『国際新聞』に掲載された詩であるとのことだが、『国際新聞』を調査したところ、そのような詩は見当たらなかった。『国際新聞』のマイクロフィルムは一部欠けている箇所があるため、たまたまその部分に掲載されていたか、もしくは掲載紙誌情報自体が誤っている可能性がある。

現代詩和歌山研究会『詩 ANTHOLOGY1958』は、現在のところ公共施設では所蔵が確認されていない。『日本風土記Ⅱ』復元にあたっては、きのくに詩人会の城久道氏を通して、同会の山田博氏が所蔵されていた資料の複写をご提供いただいた。貴重な資料をご提供くださった山田博氏と、ご尽力くださった城久道氏に心より御礼申し上げます。

〔注〕

(1)

金時鐘は、『日本風土記Ⅱ』が刊行できなくなった事情について、次のように説明している。『チンダレ』批判という問題が、一九五〇年代後半から六四、五年にわたって延々と続いたんですけど、その煽りですね、私の第三詩集になるはずだった『日本風土記Ⅱ』が散逸してしまったんですね。東京の飯塚書店というところから出版されることになり、組版もほとんど出来上がった段階で、総連から日朝親善にもとるという抗議が行きまわして、解版させられてしまったんですね。『いまチンダレ・カリオンをどう読むか』『在日』と50年代文化運動——幻の詩誌『チンダレ』『カリオン』を読む／人文書院／二〇一〇年五月)。その他、①『原野の詩』の「あとがき」、②『インタビュ』「金時鐘さんに聞く——新詩集のありか」(聞き手・細見和之／『季刊 びーぐる 詩の海へ』第四号／二〇〇九年七月)、③『インタビュ』「幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて」(金時鐘さん・姜順喜さん 聞き手・細見和之・浅見洋子／『イリプス II nd』第七号／二〇一一年五月)などでも、『日本風土記Ⅱ』について語られている。金時鐘によると、朝鮮総連の査問委員会に「解版の要求を書け」と言われ、自ら『日本風土記Ⅱ』の解版要求を書かされたそうである。『日本風土記Ⅱ』に収録予定だった作品のなかでも特に、『国際新聞』一九五八年七月二五日号に掲載された「木綿と砂」は、「自らアメリカに変節を申し出たって批判されて、共和国作家同盟と朝鮮総連から作品名を挙げて糾弾された」作品だという(前掲「幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて」)。「木綿と砂」は、アメリカで行われた「水爆平和利用」の実験で、高温を発生させることに成功したという新聞記事に

触発されて書かれた詩である。金時鐘は「皮肉」をこめて書いたが、「よし。アメリカよ。君のまだ足りない熱気に／ほくのこのちっぽけな熱気はどうだ！」という最後の三行だけが取り出され、「アメリカに協力を申し出たと批判された」（前掲「幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて」）。

『チンダレ』批判』について、金時鐘側の論説は、金時鐘及び『チンダレ』同人による当時の論考や後の回想などにかがえる。しかし、批判者側の論説については、現在のところまとまった資料は明らかになっていない。宇野田尚哉によれば、『チンダレ』批判（実質的には金時鐘批判）として決定的に重みを持ったのは共和国の朝鮮作家同盟によるもので、活字による『チンダレ』批判は主として朝鮮語のメディアでなされたという（宇野田尚哉『チンダレ』『カリオン』『原点』『黄海』解説／『復刻版『チンダレ・カリオン』解説・鼎談・総目次・索引』／不二出版／二〇〇八年一月）。以下、宇野田尚哉による論考を引用する。

《批判者の側の論説はまだ十分に収集できていないが、そのなかで最も決定的な意味をもったのが조석암・윤세평・김준석「생활과독담」조일 조선 문학회내 일부 시인들의 경향에 대하여Ⅱ（生活と独断——在日朝鮮文学会内の一部の詩人たちの傾向について——）（朝鮮作家同盟機関誌『文学新聞』一九五八年七月一〇月号初出、『朝鮮民報』一九五八年八月二日・五日・七日号〔第一三〇二〜四号〕に転載）であった」とは疑いない。一九五七年一月に平壤で하남기・강순·남시우（許南麒・姜舜・南時雨）『시집 조국에 드리시노래 재일본 조선 시인집（詩集 祖国に捧げる歌 在日朝鮮詩人集）』（朝鮮作家同盟出版社）が出版されたあたりから、共和

金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（上）

——記憶を語ることの歴史性——

※1 国の朝鮮作家同盟と在日の朝鮮語で創作する詩人たちが直結するようになっていくが、そのようななかで朝鮮作家同盟から直接に『チンダレ』（実質的には金時鐘個人）へと向けられた批判が前記の論説であった。『チンダレ』論争については、朝鮮語の關係資料をも収集して当該期の論争の「場」を全体として復元しながら考察する必要があるといえよう。』

※2 同時代の論考として、①金時鐘「盲と蛇の押問答——意識の定型化と詩を中心に——」（『チンダレ』第一八号／一九五七年七月）、②金時鐘「第二世文学論——若き朝鮮詩人の痛み——」（『現代詩』／一九五八年六月）、③鄭仁「朝鮮人が日本語で詩を書いていることについて——『チンダレ』創作上の問題——」（『樹木と果実』／一九五六年九月）、④梁石日「海底から見える太陽——日本の中の朝鮮——」（『現代詩』／一九六〇年五月）など他数本。回想として、①金時鐘・鄭仁・高亨天・犬塚昭夫・福中都生子（座談会）「在日朝鮮人と文学——詩誌『チンダレ』その他について——」（『前夜祭』第六号／一九七〇年五月）（犬塚・福中編『座談 関西戦後詩史 大阪篇』／ポエトリ・センター／一九七五年六月）、②鄭仁「チンダレ」のころ」（『季刊三千里』第九号／一九七七年二月）、③梁石日「修羅を生きる」（『講談社』／一九九五年二月）、④（対談）金時鐘・金石範／文京深編「なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか——济州島四・三事件の記憶と文学」（平凡

(2)

社／二〇〇一年二月)、⑤金時鐘『わが生と詩』(岩波書店／二〇〇四年一月)、⑥金時鐘「人々のなかで」(『現代思想』／二〇〇七年二月)など他数本。

正確には、一九七九年に発表された「金時鐘作品年譜の試み」に、すでに『日本風土記Ⅱ』の目次が掲載されている。しかもこちらでは、「一見なれた情景」の目次の最後に「わが性わが命(カリオン・二号)／彌鏡(カリオン・三号)」と記されている。『原野の詩』所収の「金時鐘年譜」の目次にはない、「彌鏡」(『カリオン』三号／一九六三年)が目次に入っているのである(本稿本文の末尾に「金時鐘年譜」をもとにした『日本風土記Ⅱ』の目次を記した。〔参照いただきたい〕)。つまり、「金時鐘作品年譜の試み」では、「わが性わが命」ではなく、「彌鏡」が第一部の最後を飾る作品になっているのだ。ただし、詩集の出版が企画された時期はどちらの年譜でも一九六〇年とされており、約三年後に発表されることになる「彌鏡」が、実際に『日本風土記Ⅱ』に収録予定であったかどうかは留保しなければならぬ。

さらに、『日本風土記Ⅱ』の説明についても、ふたつの年譜で微妙な違いがある。

・第三詩集『日本風土記Ⅱ』の出版を企画する。が、組織批判がきびしく中絶。その後原稿まで散逸。未刊詩集『日本風土記Ⅱ』の主な作品目録は左記のとおり。(金時鐘作品年譜の試み)

・第三詩集になる予定であった『日本風土記Ⅱ』の出版を企画するが、組織批判がきびしく中絶。その後、原稿散逸。収録作品は左記のとおり。(金時鐘年譜)

特に線縁部に注目すると、「金時鐘作品年譜の試み」では、「主

な作品目録」と記されていたのが、「金時鐘年譜」では単に「収録作品」になっている。つまり前者では、これ以外に収録予定作品があったとも受け取れる表現になっているのである。以上の二点は、詩集を正確に復元するために重要な問題である。今後、精緻な検討が必要である。

※1「金時鐘作品年譜の試み」は、李正憲と野口豊子によって編まれた。「特集 金時鐘——人と作品」の一頁として、『文学学校』(一九七九年八月・九月合併号)に掲載されている。金時鐘が生まれた一九二九年二月八日から、一九七九年までの事項が記されている。

当該年譜がどのような資料をもとに作成されたのかについては、特に記述はない。この時点では、金時鐘は自身の来歴についてほとんど公にはしていなかった。従って、金時鐘から直接取材した事実を主として、数少ない金時鐘のエッセイや当時の資料などをもとに年譜が作成されたと推察される。年譜の末尾には、「こういう仕事は私たちがとってはじめたものでもず。李さんと一緒にがんばってみましたが、多くの記載もれや不行届の箇所があると思います。(中略)なお、不明な点については、私の勝手な想像でうめていった部分もあります。その責任は、すべて私の負うものです。(編集部・野口豊子)」と記されている。これは、四・三事件や吹田事件との関わりなど、諸事情から明かすことができずにいた金時鐘の来歴を考慮しての記述であると思われる。

※2「金時鐘年譜」は、野口豊子によって編まれた。金時鐘『集成詩集 原野の詩 1955〜1988』(立風書房／一九九一年一月)の巻末に収録されている。金時鐘が生まれた一九二九年二月八日から、一九九〇年二月五日までの事項が記さ

れている。

「内外政治・文学状況」の欄については「はじめに」で参考資料が挙げられているが、金時鐘にまつわる事項については参考資料は挙げられていない。ただし、当該年譜では金時鐘のエッセイや、周辺人物のエッセイなどを適宜引用しながら年譜を編むという方法がとられている。全体的に「金時鐘作品年譜」よりも詳しい記述となっており、以後に刊行された資料や金時鐘への取材をもとに、「金時鐘作品年譜」に加筆修正したものと推察される。

- (3) 筆者が金時鐘に確認したところ、「目次の控え」は『原野の詩』刊行後に紛失したそうである。また詩集の原稿は、刊行できなくなった時点で版元から返却されたはずだが、たび重なる引越しのなかで、金時鐘のもとに届かないまま紛失してしまっただろう。このため、初出版と詩集版で本文に異同があったのかどうかは確かめることができない。ただし、『原野の詩』に「拾遺集」として七篇が収録される際、主として時代背景の変化に伴う改稿がいくつかなされている。主な改稿箇所は以下の通りである。
- ①タイトル「ロボットの手記」→「カメレオン、音をだす」
 - ②「総連」→「中央・委員会」(カメレオンのうた)
 - ③「反共同盟の一大集大成を」→「反共国家群の信義のほどを」
 - ④「トルコ、イラン、パキスタン」→「マレー、タイ、インドネシア、イラン」(労働昇天)
 - ⑤「南鮮」→「韓国」(雨と壺と秋と母と)。
- (4) 宇野田尚哉と筆者の調査により、現時点で全二九篇のうち二〇篇が判明している。これらの資料を基に、『びーぐる』第四号(二〇〇九年七月)の「特集・金時鐘と詩のありか」で、「『日本風土記Ⅱ』(抄)」として「拾遺集」所収の七篇を除く二三篇

が復元された。

- (5) 「カメレオンのうた」は、『チングレ』第一七号(一九五七年二月)に「ロボットの手記」として掲載された。さらに次号の『チングレ』第一八号(一九五七年七月)では、詩「大阪総連」とエッセイ「百と蛇の押問答——意識の定型化と詩を中心に——」で、組織を痛烈に批判している。

- (6) 「種族検定」は、『長篇詩集 新濁』(一九五九年)ころにほぼ書き終えられていたが、組織から批判を受けていたため一〇年以上原稿のまま保管されていた。一九七〇年八月に構造社から刊行)に「III 緯度が見える②」として丸ごと入れられている。金時鐘に確認したところ、「種族検定」を先に書き、後から「新濁」に組み込んだそうである。『新濁』版では、初出版に比べて全体的に改行が増やされており、互いを畏にかけようとする「俺」と「奴」の内面の緊張がより鮮明になっている。また、以下のように結びが大幅に改稿されている。

・潮が引くように視力が遠ざかった、声が小さく、細く、／けしつづになつて消えた……／青白い日輪の乱反射に舞う種族不明の登録証！(「種族検定」)

・潮がひくように／視力が遠ざかった。／このときだ。／眼底に／せせら笑いをねじこんだ／奴が／渦まく遠景のなかで／手を振ったのは！／暴いた登録証を／乱反射にかざし／ぼくの方がまだましたと／叩きくも屈した／おぼつかぬ朝鮮語のつぶてにのめったのは／もろくも屈した／練達な俺の／朝鮮だ！(「III 緯度が見える②」)

- (7) ガスパとはアラビア語で城塞の意であり、転じて城塞に囲まれた居住地区を指す。「種族検定」では特に、日本最大の在日朝鮮人居留地・猪飼野のことを指していると思われる。金時鐘は

猪飼野について、次のように語っている。「……私たちは猪飼野のことを当時解放地区と呼んでいた。私はいろいろと活動していたから身の安全に気をつけることがよくありましたが、そういうときには猪飼野に逃げ込んだらもう安全です。一九六〇年代前半までも、警察から大きな立ち入り調査を受けなかったのが猪飼野。もちろん、食うための対立はずまいっていたけど、それでも活動家が警察や権力機関から追われて入って来たとなると、対立関係を超えて擁護される。猪飼野はそういうた葛藤と共同性が渾然と溶け合っていた場なわけです。」（在日という鏡）／『思想の科学』第八次／一九九五年一月

〔外国人登録証を常時携帯し警察などの要求に対して呈示することを義務づけ、新規登録ばかりでなく切替の度に指紋の押捺を強制し、韓国・朝鮮人を潜在的犯罪者として管理しようとする〕（姜在彦・金東熙『在日韓国・朝鮮人——歴史と展望』／一九八九年九月）抑圧的なものであった。

先行論文（ただし、『新潟』論として書かれたもの）で必ず言及されている重要な場面である。①梁石日「金時鐘論」②『アジア的身体』／青隆社／一九九〇年四月↓平凡社ライブラリー／一九九九年一月、③細見和之「金時鐘詩集『新潟』論」④『現代思想』／二〇〇〇年一月）↓（改題）『一篇の詩の記憶』しているもの——金時鐘詩集『新潟』論『言葉と記憶』／岩波書店／二〇〇五年一月）、⑤宮沢剛「一九五〇年代（から）の在日朝鮮人文学——はみ出すことと遅れること」『文学』／二〇〇四年一月）、⑥呉世宗「道と自己」『リズムと抒情の詩学——金時鐘と「短歌的抒情の否定」』第五章／生活書院／二〇〇一年八月）など。

ただし、先行論文ではこの場面に特化し過ぎる傾向があるのに

対し、本稿では「俺」が三種類の（種族検定）にさらされていることに注目した。さらに、「奴」と「猫背のドクター」の間には国家と民衆、「おつさん」と「アジュモニ」の間には男と女という分断線が走っており、「俺」を引き裂く状況を重層的にしている。

⑩ 細見和之「一篇の詩の記憶しているもの」（注（9）に同じ）
⑪ 呉世宗「道と自己」（注（9）に同じ）。呉世宗は、「朝鮮語との関係」に着目し、「種族検定」全篇を読解している。当場面についても、『十五円五十銭』が朝鮮人を、「シボレット」がエフライム人を見分けさせたのと同様に、「朝鮮語の「正確な発音」が「理念的な民族性の基準」として機能し、「俺」と「正真／親愛なる同胞」を振り分けているという解釈を提示している。だが、このような解釈を成り立たせるためには、『犬汁』／『개장』が「十五円五十銭」や「シボレット」のように、発音の良し悪しを見分けるために使われてきた特殊な言葉であるなどの論拠を示さねばならぬ。また詩の表現として、「俺」の発音が正確でなかったことを感知させるような特別な表現にはなっていない点にも疑問が残る。

⑫ 「北鮮」・「南鮮」・「韓国」・「共和国」・「朝鮮」・「日本」という様々な呼称や国家名が入り混じる引用部では、民族差別や分断イデオロギーに引き裂かれる在日朝鮮人の苦しさ如実に表現されている。

金時鐘の来歴に照らし合わせると、金時鐘は朝鮮半島の北にある元山市で生まれ、朝鮮半島南端の島・濟州島で育った。詩中の「北鮮」・「南鮮」は、分断国家樹立前の、朝鮮半島の北部・南部という、地理的な意味で用いられていると考えられる。しかし同時に、「北鮮」・「南鮮」は、植民地統治時代には地域の

略称として、そして分断国家樹立後には国家の略称として、日本人によつて差別的に用いられてきたという歴史の経緯がある。また、「北朝鮮」「南朝鮮」の略称である「北鮮」「南鮮」は、共和国寄りの呼称でもある。これに対して、詩中の「韓国」「共和国」は、国家名としての大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国の略称として用いられている。

「朝鮮」という呼称には、日本人による民族差別や、分断イデオロギーによつて、マイナスイメージがつきまとう。しかし、金時鐘は「すぐれて一つの朝鮮」（金時鐘『連帯』ということについて）／民族差別と闘う協議会第四回定期総会での講演録／一九七八年一月 ↓ 『クレメンタインの歌』／文和書房／一九八〇年一月 ↓ 『在日』のはざままで／一九八六年五月 ↓ 平凡社二〇〇一年三月）という意味を込めて意図的に「朝鮮」と呼ぶことで、民族差別や分断状況を引き受け、それを取り越えようとする。

(13)
金時鐘は、当時の状況を「……僕がどっかの集まりに行くどわーっと人がのいてそこに空間ができるんだから。誰も寄りつかない。付き合いで僕と握手せんらんとするときには、指をこら出してね、ちよつとでも触れさせないようにするんや。そんなんやで、組織制裁というのは」と語っている（金時鐘さんに聞く——新詩集のありか『びーぐる』第四号／二〇〇九年七月）。

文京珠は、「……心配だったのは、われわれがこの戦争でなんの役割も果たしていないために、将来の国際関係においての発言権が弱くなるだろうということだ」（金九／梶村秀樹訳註『白凡逸志 金九自叙伝』／平凡社東洋文庫／一九七三年）という、独立運動家・金九の言葉を引用しつつ、「解放朝鮮の歴史をふ

(15)
りかえらうとするとき、往々にして忘れられがちなのは、まさに金九が危惧した事実、つまり『解放』そのものが、主に外力によつてもたらされたということである」と考察している。それは、解放後の朝鮮半島の運命が、日本の支配を退けるうえで決定的な役割を果たした米ソ両大国の朝鮮半島政策に大きく左右されざるをえなかったことを意味している。解放後、朝鮮半島は米ソの分割占領の下に置かれることになるが、そのなかで米ソの間で合意された「信託統治案」（全朝鮮をカバーする朝鮮人自身の臨時政府を樹立するが、これを五年間に限つて米・英・中・ソの四大国の「信託統治」の下に置くというもの）は、「その可能性は限られたものだったとしても、朝鮮民族が選択しうる統一国家樹立への唯一のシナリオであった。しかし、米ソの対立が深まるなかで、そのような統一への限られた「可能性」がといえ去り、朝鮮の解放が分断へと向かうことになる。そして四・三事件の悲劇も、「……陸地部の政治情勢とは相対的に独自の動きを示していた濟州島にそうした両極化の矛盾が凝縮されて持ち込まれたことに発している」と文京珠は指摘している。（『濟州島現代史 公共圏の死滅と再生』／新幹社／二〇〇五年四月参照）。

金時鐘・金石鶴／文京珠編『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか——濟州島四・三事件の記憶と文学』（平凡社／二〇〇一年二月）。金時鐘は、「ぼくは、ほんとに実感をもつて思った、もう主人が変わっただけ。日帝の主人が変わっただけや！」と。米軍が占領敷いてまず布告出したのが、朝鮮人民共和国否認と朝鮮総督府吏員復職令で。逃げ打った連中らが大手を振って帰ってくる。解放させられた人民委員会側もじつとはしていない。米軍と直接軋轢生じとった間にあの連

中らが入ることで、同族同士でぶつかるようになる。だからなーんにも変わらなかつた」と語っている。

(16)

梁石日は、金時鐘から耳にした話として次のように語っている。「彼は濟州島の『四・三事件』に連座して死刑寸前までいって、杭に縛られて、目隠しされて、ずらっと処刑される人が十人ぐらいて、当時の政府軍がガチャガチャと撃鉄を落とす音まで聞こえた。そこまでいったんだけど、同じ村の人で、その隊の隊長か、あるいはもつと上の幹部が馬で駆けつけてきて、『ちよつと待て。こいつは関係ないんだ』と言って、金時鐘だけその場で釈放された」(梁石日「異端は未来の扉を開く」／一九九八年一〇月)「異端は未来の扉を開く」／アートン／一九九九年三月。

(17)

例えば『新潟』では、「海をわたって／軍艦でやってきた」↓「ドル文明」が、「ぼく」を「太陽までを／いみきらう」↓「みみず」に変身させる(「雁木のうた」①)。また、爆弾の部品を製造して生計を立てている在日朝鮮人の工場が、朝鮮戦争に反対する組織の活動家によって破壊される場面が、「さかしまに／太陽の黒点へ／つっこんだ」と表現されている(「雁木のうた」②)。その他多数。

「太陽」の根源的なイメージとしては、金時鐘が皇国少年として迎えた八月一五日正午の太陽が想定される。「正真おれは／午前中いっぱい開いていた男だ。／なんの前ぶれもなく／回天は太陽のあわいから降ってきたのだった。／突如あおられた熱風に／いきおいまなごくらんだ夜の男だ。／おれの網膜にはそれ以来島が巣食っている。／日日緑の羽をひろげて／そこびかかる夏をかげらすのである。」(「影にかける」『猪飼野詩集』／東京新聞出版局／一九七八年一〇月)。

(18)

実際、金時鐘は「在日」という副詞をもった朝鮮人(金時鐘「首と蛇の押問答」〔注(5)に同じ〕)という立場を主張している。金時鐘にとって「在日」という場の発見は、日本・共和国・韓国という、在日朝鮮人を引き裂く三つの対立項を同一の視野の内に見据え、緊張関係のなかでこれらをつなぐ思想の発見であった。金時鐘と文学サークルや同人誌を共にしていた梁石日は、当時の在日朝鮮人が置かれていた状況や心情を踏まえたうえで、「しかしながら、在日を主體的に生きようとする在日論は組織のきびしい批判に晒される。在日とは日本の植民地政策の産物であって、それは一時的な現象であり、いずれは祖国に帰国するのだという想いが、当時の在日同胞の一般的な心情だった」と振り返っている(梁石日「金時鐘論」〔注(9)に同じ])。

(19)

「濟州島特有の／生あたたかい季節雨に溶けこんでいた。」という箇所では、濟州島固有の気候に、削がれた陸葉から滴る血、「アンネ」の初潮の生あたたかい血のイメージが重ねられている。濟州島は、年間を通して気候が温暖で、雨の降る日が一年のおよそ半分を占める。天気も気まぐれで、一日の間に数十回も太陽のぞいたり、雲が覆ったり、霧が島を包んだりするという(写真・金秀男／文・韓林花／訳・神谷舟路「写真集 濟州島1 漢拏山と人々の暮らし」／国書刊行会／一九九三年七月参照)。

(20)

金大中政権の誕生を受け、一九九八年一〇月に金時鐘は五〇年ぶりに故郷濟州島を訪れ、父母の墓参りを果たした。その後、二〇〇〇年四月一五日に東京で行われた講演「濟州島四・三事件と在日朝鮮人」(記憶せよ、和合せよ 濟州島四・三事件と私)『図書新聞』／二〇〇〇年五月二七日↓米田綱路編著「語

りの記憶・書物の精神史』／社会評論社／二〇〇〇年一月）で、四・三事件の記憶を詳細に語っているが、これが公の場で四・三事件での体験をはじめて明かしたものであるとされている。ただし、身近な人や小さな集まりなどでは、はやくから断片的に語っていたようである。その後、「看守村書房」『文芸首都』／一九五七年八月、「鴉の死」『文芸首都』／一九五七年二月）を皮切りに四・三事件をテーマに小説を書き続けてきた在日朝鮮人作家・金石範と、四・三事件に関する対談を行っている。その内容については、『なぜ書きつづけてきたか』なげ沈黙してきたか』〔注（15）参照〕にまとめられている。

「わが性わが命」について金時鐘は、「あの段階引用者注」わが性わが命」を発表した段階で、『新潟』はほとんど書き終わっていましたからね。その関連で四・三をもつと書きつづけるという思いがなつた時期のはしりですね。ああいうの書くということは、日本での居住権を失う、逮捕されるということがありましたからね。いつも逡巡しながら、でも書きためと書きたいという思いもどこかにあって。」（金時鐘さん・姜喜さん〔聞き手／細見和之・浅見洋子〕「インタビュー」『幻の詩集』『日本風土記Ⅱ』復元に向けて）／「イリプス II rd」第七号／二〇一一年五月）と語っている。証言としては数十年間沈黙してきた四・三事件の記憶が、詩においてははやくい段階で書きためられていたこと、そして詩という形式で発表するにしても「日本での居住権を失う、逮捕される」という危険性と隣り合わせであったことがうかがえる。

アンネ・フランク（一九二九年六月二日〜一九四五年三月上旬）は、金時鐘と同じ年に生まれている。この偶然は、死線をくぐり抜けて生きながらえた自分の生と、幼くして死んだアン

ネの生が重なるような感覚を金時鐘に与えたのではないか。アンネの日記は、一九四七年オランダのコンタクト社から出版され、日本では一九五二年に文芸春秋新社から出版された。「わが性わが命」が発表される少し前には、映画公開もされている。ただし、詩中の「アンネ」は、アンネ・フランクその人というよりは、多くの少女たちの象徴として書きつけられている。

日本軍の残していった日本刀や三八式銃・九九式銃などの武器は、討伐側でもバルチザン側でも利用された。この表現は特に、日本による植民地支配下での対日協力者が、米軍政府支配下においても再びその手先として暴力の担い手になるという、四・三事件の暴力構造を端的に示している。ここには、四・三事件や朝鮮半島の分断は、日本の植民地支配と切り離してとらえることはできないという金時鐘の認識がある。

『済州日報』四・三取材班『済州島四・三事件』全六卷（新幹社／一九九四年四月〜二〇〇四年四月）参照。例えば、以下のような証言が記されている。「倉庫の中にはいろんな村の人が囚われていましたが、情け容赦のない暴力とともに目を覆いたくなるような場面が繰り広げられました。男女を呼び出して殴りつけながらむりやり性交をさせ、女性の局部を火であぶったりもしました。〔洪敏士による証言〕（前掲第五卷／二〇〇〇年四月）。「ある時は女三名が帰順してきたのですが、全裸にした後、局部を火で炙り、そのなかに電線を入れて電気拷問をしました。その時はわたしもあのように恐ろしい目にあうのではないかと戦々恐々としていたので、恥ずかしいという気すら起こりませんでした。〔洪南老翁による証言〕（前掲第六卷／二〇〇四年四月）。

（24）「三〇万島民のアカの島を撲滅するためには、ガソリンを空か

らまいて全島民殺してもいい」(警務長官・趙炳玉)、「漢華山
 一帯にガソリンを撒いて空から焼夷弾を落として放火すれば、
 濟州島のアカを皆殺しにすることができる」(第一一連隊隊
 長・朴珍泉)と豪語した者もいた(『なぜ書きつづけてきたか
 なぜ沈黙してきたか』(注(15)に同じ)。

(25) 金時鐘「なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか」(注
 (13)に同じ)

(26) 金時鐘は『新潟』においても、おびただしい死者を海に沈めた
 浮島丸事件や四・三事件を描きながら、「もはや／無機物の集
 積が／海だなどは／いまい。」(Ⅱ)海鳴りのなかを①)と
 うたい、「風は／海の／深い／溜息から／洩れる。」(Ⅱ)海
 鳴りのなかを②)とうたった。金時鐘が描き出す海は、金時
 鐘自身の記憶や朝鮮民族の記憶と結びつきながら、あたかもそ
 れ自身が生きていくかのように息づき、うねっているのである。
 「木綿の砂」に関しては、注(一)参照。「哄笑」は、核戦争で
 破壊されつくした未来像を空想することで、原水爆実験が繰り返
 返される同時代への危機感を示している。生き残ってしまった
 「私」が、ラクダに乗って砂漠のような荒野をさまようとい
 うストーリーである。

(28) 前述した三篇(「カメレオンのうた」・「種族検定」・「わが性わ
 が命」)の他、核を諷刺した「木綿と砂」・「哄笑」、米軍基地反
 対闘争での警官隊との衝突を描いた「目撃者」などが挙げられ
 る。また、「歯の条理」では大國の思惑で結ばれる条約のから
 くりが諧諷的に暴かれており、さらに「労働昇天」では労働ま
 でもがアメリカを中心とする反共同盟に組み込まれているこ
 とが問題にされている。

(29) 『日本風土記』刊行直前の一九五七年一〇月に金時鐘は父の死

の知らせを受け、『日本風土記Ⅱ』が書き進められていた一九
 六〇年四月には母の死が知らされることになった。

(30) 金時鐘「幻の詩集『日本風土記Ⅱ』復元に向けて」(注(20)
 に同じ)

(31) 行方不明になった二つの部屋」のイメージは、数十年後に『化
 石の夏』(海風社／一九九八年一〇月)冒頭の「予感」に引き
 継がれている。ただし、「予感」では抽象性が高められており、
 直接的に父は登場しない。

(32) この詩が書かれる数カ月前の一九六一年四月二二日に、ソ連の
 ユーリー・ガガリン少佐が乗る有人宇宙船「ボストーク一号」
 が地球一周に成功し、人類初の宇宙旅行が果たされた。その一
 か月半後には、アメリカ合衆國のジョン・F・ケネディ大統
 領が一九六〇年代の終わりまでに月に到達するというアポロ
 計画を発表した。この計画は、一九六九年七月一六日にアポロ
 一一号の打ち上げによって達成された。

(33) 金時鐘が実際に読んだ聖書を特定することは困難である。便宜
 上、引用は聖書協会連盟『旧新約聖書』(出版年不明)に拠つ
 た。

(34) 金時鐘は、苦渋をこめてしばしばこのように表現する。例えば、
 エッセイ「クレメンタインの歌」(谷川俊太郎編『ことは・詩・
 子ども』／一九七九年四月)↓「クレメンタインの歌」／文
 和書房／一九八〇年一月)↓『在日』のはざまで』／立風
 書房／一九八六年五月／平凡社／二〇〇一年三月)では、父母
 を濟州島に残してきたことについて、次のように語っている。
 《確かに私は、不孝の限りを尽くした男ではある。親の死に目
 にも会わなかったばかりか、現実に父と母の、墓所の所在さえ
 定かでない。倫理観に篤い朝鮮の伝統的風習の中であって、親

の墓所を無縁仏にするようなことがどのようなことを意味するかは、もはや論をまつまでもないであろう。いかなる理由を持ってしてもとうてい釈明のつくことがらではない。それこそ非道も極まったという他ないものだ。それほどに私の〔在日〕は罪深い日々にまみれている。といつて、私の寝もやらぬ思いがこのことだけであつていつているのかという、むしろそうではないからこそ、私のまみれた折りのうずきがあるのである。／＼少なくとも、私の〔在日〕には、父、母の諒承が介在した。正確には日本に「在留」することの諒承であつたと言ふべきかもしれないが、ともかく親の「思い」が働いて、私の「在日」する根拠は成り立つたのだつた。理屈は充分足りていた。ひたかくしのうしろめたさをかくしおおせるならば、である。怖れが折りに似るのもこのせいだろう。すべてを承知で、私は父母を見離れたのだ。それも父と母の、熱い「思い」におもねてであつた。あろうことか、私は一再ならず親の「思い」を食いものにした。』

- (35) 金時鐘は第一詩集『地平線』について、「……今日では片々たる一つ一つの抒情詩であつても、それが集まつて成つた詩集というものは、当然叙事詩的性格をおびるものであることは誰も否定できない。私もそういう見地から内容を二分して一冊の詩集とした。」(私の作品の場と『流民の記憶』／『デンダレ』一六号／一九六五年八月)と述べており、最初期から詩集を編むということに意識的であつたことがうかがえる。
- (36) 金時鐘「なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか」〔注(15)に同じ〕
- (37) 金時鐘「クレメンタインの歌」〔注(34)に同じ〕
- (38) 金時鐘「私の出会つた人々」(岩波講座 子どもの発達と教育)

金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(上)

——記憶を語ることの歴史性——

八一

- 8 別巻 発達の記録と分析』／一九八〇年一月) ↓『クレメンタインの歌』／文和書房／一九八〇年一月) ↓『在日』のはざままで』／一九八六年五月↓平凡社／二〇〇一年三月)
- (39) 金時鐘「なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか」〔注(15)に同じ〕
- (40) 金時鐘「私の作品の場と『流民の記憶』」(『デンダレ』第一六号／一九五六年八月)
- (41) 宮沢剛(金時鐘の詩を読む ——読むことの『自由』と書くことの不『自由』——)『日本近代文学』第六九号／二〇〇三年一月)

〔付記〕

*『日本風土記Ⅱ』収録予定作品の引用は初出誌に、それ以外の詩の引用は『集成詩集 原野の詩 1955～1988』(立風書房／一九九一年一月)に拠つた。また、『デンダレ』・『カリオン』の引用は、『復刻版 デンダレ・カリオン』全三巻・別冊一(不二出版／二〇〇八年一月)に拠つた。改行には「/」、行間が空けられている箇所には「/」と記した。旧漢字は新字体に改め、仮名遣いはそのままとした。ルビや記号などは適宜省略した。

*本稿は、以下の拙論をもとに、大幅に加筆修正した。示唆に富むご指摘やご教示をくださいました諸先生方に、深謝申し上げます。(『エッセイ』)「(死)から(再生)へ——金時鐘「わが性わが命」が抱える生命の記憶」(『千年紀文学』第八二号／二〇〇九年九月)、「(エッセイ)「よみがえる記憶——金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』を読む」(デンダレ研究会編『在日』と50年代文化運動——幻の詩誌『デンダレ』『カリオン』を読む)／人文書院／二〇一〇年五月)。(注釈)「金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』

復元と注釈の試み（暫定版）『論潮』第三号／二〇一〇年七月）

*この研究は、細見和之先生と筆者との共同研究の成果の一部である。
ご教示くださいました細見和之先生に、深く御礼申し上げます。
『日本風土記Ⅱ』の復元にあたっては、野口豊子氏による詳細な年譜「金時鐘年譜」（『原野の詩』所収）に拠る所が大きかった。また、共同研究として復元作業に取り組む際、宇野田尚哉先生に貴重な資料をご提供いただいた。厚く御礼申し上げます。未刊行の詩集を引用することを快諾してください、貴重なお話を聞かせてくださいました金時鐘先生に、心より御礼申し上げます。

（あさみ ようこ・本学大学院博士後期課程在学）